

# 近世イングランドの宗教史叙述に見る 諸宗教相対化の構造

—サミュエル・パーチャス『パーチャスの巡礼』を例に—

河底 佑佳\*

## 1. はじめに

近世は、ヨーロッパ人が目にする宗教の範囲が著しく広がった時期である。もはやキリスト教徒はキリスト教やその異端のみを見ているわけにはいかず、宣教や交易範囲が広がることによって世界中の宗教と出会い、宗教という語によって指し示される信仰・儀礼の範囲は拡大されていった。宣教師たちの中にも航海者たちの中にも、各地で出会った宗教や風物について記述を残す者が現れ、ヨーロッパ人にとって馴染みのない土地の地誌が形成され始めた。本稿で注目するサミュエル・パーチャスは、そうした著述家たちの文献に基づき、宗教という主題に沿って天地創造の時から同時代までの宗教を歴史的に描き出すことを試みた人物である。

本稿では、上記のような近世の状況において、宗教と呼ばれうる対象の座を長らく排他的に独占してきたキリスト教がいかに相対化され、諸宗教の総称としての宗教 *religion* という概念がいかなる過程・要因を経て成立したのかという問題意識に基づき、パーチャスの主著を分析する。諸宗教に関する記述を収集し彼が述べるところの宗教史 (*a Historie of Religion*) を描き出そうとしたパーチャスは、その過程でキリスト教を相対化したのだろうか。もし、彼がキリスト教を相対化したのであれば、いかなる論理、いかなる構造がそれを可能にしたのだろうか。

以下では最初にパーチャスと彼の主著について説明し、パーチャスに言及した先行研究の記述から彼の大まかな思想的傾向を提示する。その後、彼の著作に見られる宗教相対化の様相について触れた先行研究の記述を紐解きつつ、上記の問題についての考察を行う。

## 2. パーチャスの生涯とその著作について

16 世紀後半から 17 世紀初頭を生きたイングランド国教会聖職者にして著述家であるパーチャス (c. 1577-1626) は 1577 年にエセックスのタックステッドにて受洗し、1594 年にケンブリッジ大学に入学、1598 年には国教会の執事となり聖職者の道に足を踏み入れた。以降、エセックスのパーリー、イーストウッドなどで補助司祭や司教代理を務めた後、1613 (または 1614) 年にはロンドンに移り、大主教ジョージ・アボットのチャプレンを務めた。次いで 1614 年にラドゲートのセント・マーティン教会の主任司祭の座に就き、1621 年から 1624 年にはキングジェームズ・カレッジのフェローとして、また同時期 (1622 から 1624

\* 東京大学大学院博士課程, 日本学術振興会特別研究員 DC2

年)にはヴァージニア会社の一員としても活動し、1626年にブレッズストリートのオールハロウズ教会にて主任司祭となった。1610年代前半からは、地理学者にして航海記の編纂を積極的に行った著述家リチャード・ハクルートとの親交を深め、資料や手稿を借り受ける仲となった。パーチャスの著作の題、後述する先行研究において度々ハクルートの名が登場するのは、彼らに親交があったことと無縁ではない。総じて言えば、パーチャスは社会的で勤勉、そして評判の良い国教会聖職者でありロンドンの知識人サークルの一員であった<sup>(1)</sup>。

次に彼の著作、とりわけ巡礼の語が表題に含まれるという点において類似した表題をもつ、しかし内容において幾分異なる複数の著作を整理し、本稿において議論の主題となる著作を示したい。パーチャスの最初の著作は、1613年に発表された『パーチャスの巡礼、あるいは世界と、天地創造から今日に至るまでのすべての時代およびすべての発見された場所において観察されたもろもろの宗教の物語 *Purchas his Pilgrimage. Or Relations of the World and the Religions Observed in all Ages and Places Discovered, from the Creation unto This Present*』<sup>(2)</sup> (以下『巡礼』)である。生まれた土地であるエセックスのタックステッドから、200マイル離れたこともなかったと述べる<sup>(3)</sup>パーチャスは、種々の旅行記をもとに『巡礼』を記した。同著は、宗教を主題に据えて聖書の記述を歴史的記述と捉えつつ、神による世界の創造に関する記述を行うことから始まり、世界の各地域とその地域における宗教の様相を地域ごとに数巻に分けて記している。アジアと題される第1巻から第5巻では、世界の創造など聖書に基づく記述に加えて古代パレスチナ、アラビア、ペルシア、インドの地域と当地の宗教が扱われる。アフリカと題される第6巻と第7巻では、アフリカ地域やその地域の宗教が述べられ、アメリカと題される第8巻と第9巻では、北米と南米のそれらが記述の対象とされる。『巡礼』は、ハクルートによって提供された資料等を参考に加筆された第2版が1614年に出版される。その後も加筆は続けられ、1617年には第3版、1626年には第4版が出版されることとなる。本稿において分析の対象とするのは、この『巡礼』である。

『巡礼』第3版と第4版の間には、『パーチャス、その巡礼者 *Purchas his Pilgrim: Microcosmus, or, The History of Man*』(1619, 以下『巡礼者』)、『ハクルートの遺稿、パーチャス、その巡礼者 *Hakluytus Posthumus, or, Purchas his Pilgrimes*』(1625, 以下『ハクルートの遺稿』)が出版されている。『巡礼者』も『巡礼』同様に旅行記を扱うが、『巡礼者』の主眼は同時代のカルヴァン主義的思弁的神学にあった<sup>(4)</sup>。1620年頃にパーチャスが入手したハクルートの遺稿に対する感謝を込めてその題がつけられた、『ハクルートの遺稿』は4巻本で印刷に3年以上を要した2000頁近くに達する大著であり、パーチャスの最大の業績と評される<sup>(5)</sup>。『ハクルートの遺稿』はハクルートの遺稿だけでなく、パーチャスが約20年にわたって収集したヨーロッパ、アジア、アフリカ、アメリカに関わる種々の旅行記をまとめたものであり、古代近東から同時代のイギリス植民地までにわたる世界中の地理的・宗教的記述を集め、編纂されている。パーチャスの著作のいずれにおいても、その主題は宗教であると巻頭言に述べられるとの指摘がなされている<sup>(6)</sup>が、少なくとも目次の内容を見る限りにおいて、『ハクルートの遺稿』は、『巡礼』よりも地理的・歴史的記述において充実した記述を提供しているようである。

### 3. パーチャスに関する先行研究

すでに述べたように、パーチャスの主著は多くが歴史的・地理的・宗教的百科全書の様相を呈しており、その著作全体あるいはパーチャスのみを対象とした先行研究は決して多くない。そうした中でパーチャスを単独で扱っており、また上に挙げた巡礼の語を表題にもつ一連の著作を分析の対象としている点において特筆するべきが、ペニントンが編集した *The Purchas Handbook: Studies of the Life, Times and Writings of Samuel Purchas, 1577–1626* である。2巻組である同書の第1巻はパーチャスの生涯や著作、編集者としての彼の姿や、各地域に関して彼が扱った事柄等が様々な研究者によって論じられる各章によって構成される。第2巻では、パーチャスが参照した文献や、巡礼の語を表題に含む上記の著作群の複写の保存場所など、パーチャスの著作にアクセスするにあたって必要になるであろう情報がまとめられている。

アーミテイジ著『帝国の誕生—ブリテン帝国のイデオロギー的起源—』では、「プロテスタンティズムと帝国—ハクルート、パーチャスと所有権—」と題された章において、パーチャスと彼の思想がハクルートと対比されつつ論じられる。アーミテイジによれば、パーチャスの神学は「後世には理解できなく」なるほどに政治と複雑に結びついている<sup>(7)</sup>が、彼の著作には2つの思想的要素が見出だせる。すなわち、イングランドに対する選民ナショナリズム的要素とコスモポリタンの要素である<sup>(8)</sup>。前者の要素は、イングランド、スコットランド、アイルランドの三王国が北ヨーロッパのプロテスタント代表として共に反教皇制を唱え、キリスト教世界を牽引しようとパーチャスが考えたことに起因する。この考えに加えて、一見矛盾しているようではあるが、最終的にはローマ・カトリック教徒すら同じキリスト者であるとみなさねばならないともパーチャスは考えていた。『巡礼』等の執筆過程で世界の宗教について調査したパーチャスは、イスラーム世界と比較した際にキリスト教が信仰される地域が狭いことに気付いた。そして、アメリカ大陸など異教徒の土地の領有権を正当化する教皇権と教皇を政治的に攻撃しつつ、その一方で、世界においてキリスト教が版図を拡大するためにローマ・カトリックとプロテスタントの別なく、キリスト教徒が協同する必要があるというコスモポリタンの思想を有していたのである。

本稿における問題関心の中心、すなわち近世におけるキリスト教の相対化と諸宗教の総称としての宗教 *religion* という概念の出現過程に関連が深い、宗教学における先行研究の中からパーチャスに言及する著作は2つ挙げられる。まず、近代宗教学の成立における近世（ルネサンスとロマン主義の間）の重要性を説く、ストロームサによる *A New Science: the Discovery of Religion in the Age of Reason* におけるパーチャスへの言及を見てゆこう。宗教への近代的アプローチが始まった要因として、①アメリカ、南・東アジアの発見、②古代への関心・文献学の発展、③宗教改革とそれに伴う宗教戦争を挙げるストロームサは、旅行記を通じた比較宗教的態度の出現に関連してパーチャスの名を挙げる。ストロームサにおいてパーチャスの著書『巡礼』は、比較宗教と旅行記の間に結びつきがあることを強調しつつも、結果的には、同時代的な反ローマ・カトリック的姿勢、すなわちローマ・カトリック的儀礼批判に留まった著作であると解釈される<sup>(9)</sup>。

次に、増澤の著作『世界宗教の発明—ヨーロッパ普遍主義と多元主義の言説—』における

パーチャスに関連する議論を紹介する。20 世紀初頭にかけて成立した世界宗教という宗教の新たなカテゴリが生まれる過程を、19 世紀以降の諸宗教と言語・人種の観念を結びつつ行われたヨーロッパ人によるアイデンティティ形成の過程として描く増澤の著作においては、世界宗教成立以前の時代における宗教記述の傾向を示す一例としてパーチャスの著作が挙げられる。パーチャスの『巡礼』を含む世界の諸宗教を扱う同時代の著作は、非キリスト教の異質さによって一なる神を認識するキリスト教を高めつつ、キリスト教の教派的分裂のような逸脱については非キリスト教と峻別する必要があった<sup>(10)</sup>。しかし、パーチャスにおいては未だ背教者 (Apostasies)・分派 (Sects)・異端者 (Heresies)・異教徒 (Heathens) が全て、正しい宗教からの逸脱の形態として同等に並べられており、前記の必要性を満たしてはいない。ただし、個々の宗教を分けるのではなく正しい宗教とそうでない宗教 (異教・異端) という区分けで語るのには、当時においては一般的であったと増澤は述べる<sup>(11)</sup>。この点において、パーチャスの記述は同時代的な宗教記述の範疇にあるのである。

以上に述べてきた先行研究における主張を見れば、パーチャスの宗教観・宗教描写は 17 世紀初頭のプロテスタントの宗教観とほとんど矛盾しないと言いうるのであろう。では、本論において問題となる、諸宗教を含む宗教 religion という概念の形成や、その過程において発生するキリスト教の相対化についても、彼の著作には特筆すべき点はないのであろうか。この問題については、パーチャス、特に『巡礼』におけるパーチャスの宗教観を論じた先行研究の記述に沿って検討してゆきたい。

#### 4. 『巡礼』において示される宗教 (1) — 『巡礼』の宗教描写に関する先行研究の分析—

本章では、『巡礼』初版を対象に古典的異端学と『巡礼』の差異を分析したディモックによる先行研究を手がかりに議論を進める。まずは、『巡礼』におけるどのような記述に着目すべきかを明確にするために、パーチャスが描く宗教史の特徴について論じたディモックの議論を概観したい。パーチャスは自身の宗教史叙述に「新しさ The newness」があると主張した<sup>(12)</sup>。この「新しさ」に関する先行研究による分析は、本稿の目的に照らした際『巡礼』のいかなる宗教描写に着目すべきかを、より明確にしてくれる。

ディモックはパーチャスの「新しさ」を、より以前の時代から続く、世界中の諸宗教を異端の諸形態として捉え、網羅的に記述する異端学の諸文献 (ダマスコのヨハネの『異端について *Perí haíreseōn*』, エウセビオス『教会史 *Historia Ecclesiastica*』, エピファニオス『全異端論駁 *Penarion*』など) との相違点を通じて提示する。パーチャスとそれら異端学の差異は、①宗教改革の影響によるローマ・カトリックへの反感の吐露、②宗教的差異に対するカルヴァン主義的な歴史観、③多様性への称賛ともとれる方法論である<sup>(13)</sup>。

1 点目の指摘については、多くの説明を要しないであろう。ローマ・カトリックを異教徒の一形態であるとして中傷する手法、ペイガノパピズム (paganopapism) は、宗教改革当初から用いられてきた手法である。多くの非キリスト教を描写する『巡礼』において、イングランド国教会からのローマ・カトリックに対する反感を顕にすることは、パーチャス独自の立場と言うよりも、むしろ当時のプロテスタント的潮流に則ったものである。『巡礼』前書きには、「カプチン会、イエズス会、あるいは他のローマ・カトリック教徒に驚嘆し、ほ

とんど崇拜する者」は「ローマ・カトリック教徒が異教徒たちに匹敵することを知らる」という文言が現れる<sup>(14)</sup>。加えてローマ・カトリック的儀礼に対しては、「大部分がカルデア人、エジプト人、そして他の異教徒たちの起源に由来する」<sup>(15)</sup>と述べられる。ディモックによれば、パーチャスが『巡礼』において宗教を定義する際には、教父たちや異端学、ローマ・カトリシズムの遺産との闘いがあった<sup>(16)</sup>。パーチャスはアウグスティヌスの言葉を引きつつ、より高位の神的本性をもつと思われるもの (*that which is esteemed a higher and diuine nature*) <sup>(17)</sup>への信仰と儀礼を真の宗教の要素として挙げ、しかしすぐに、その神的性質をもつ存在 (*a higher and diuine nature*) をキリスト教的な神 (God) へと言い換える。つまりパーチャスは、キリスト教の相対化に結びつく諸宗教の存在を認知していた<sup>(18)</sup>。そのため、自身の宗教の定義において枢要な概念である神的存在をキリスト教的神の範囲に収めることによって、キリスト教の絶対性を保とうとしたのである。

次に、『巡礼』における歴史叙述の方法について見てゆきたい。『巡礼』は、一なる信仰が墮落した結果として宗教が多様化した現在があるという歴史観に立つ。例えば第1巻では、カインによるアベル殺害が、アダムが奉じた原初の宗教からの「宗教の最初の分裂」<sup>(19)</sup>とされ、続く第2巻ではヘブライ人へと語られた神の言葉が彼ら自身によって退けられ、「異教徒たちに席が譲」<sup>(20)</sup>られたと語られる。この時のヘブライ人の「墮落は世界の豊かさとなり、そして彼らが失墜するほど異教徒たちは豊かになった」<sup>(21)</sup>。原初の宗教がカインとアベルの間で分裂し、古代アジアへと散り、神の言葉を受け取ったヘブライ人も自らそれを打ち捨てたことにより、さらなる宗教的分裂すなわち異教徒の繁栄を生んだというパーチャスの歴史観は、ディモックが指摘するパーチャスの2点目の中世までの異端学に対しての「新しさ」に関わっている。しかしながら、上記のような、歴史の道程を原始の真の宗教の漸進的墮落とみなす歴史観は、カルヴァンと同様のプロテスタント的歴史観でパーチャスに特有のものではなく、加えて、宗教的墮落からの回復の道筋もまた同時代的なものであるとディモックは指摘する<sup>(22)</sup>。

パーチャスは、世界が差異をもつ段階を経て単一のものへと回復するという神学的歴史を描き出した。このことは、『巡礼』第6巻14章に記される「[肌の色が] 褐色のムーア人、黒色のニグロ、薄黒色のリビア人、灰色のインド人、オリーブ色のアメリカ人が、より白いヨーロッパ人と共に一人の偉大な羊飼いの下で、一つの群れとなるであろう」<sup>(23)</sup>との文言によって明らかである<sup>(24)</sup>。諸民族がキリストという「偉大な羊飼い」によって、最終的には肌の色・民族の壁を越えて一なる集団へと変容するという道筋は、すでに『共通祈祷書 *The Book of Common Prayer*』(1559)などの16世紀後半の文献から現れている。前記の文言から読み取れる、諸宗教の差異がキリスト教的な唯一絶対性へと回収されるというパーチャスの観念は、宗教的差異を描写しつつも差異が存在する可能性を本質的には否定しているキリスト教的な見方であるとディモックは主張する<sup>(25)</sup>。

ここで一つの疑問が生じる。ディモックが主張する『巡礼』の3つめの「新しさ」である多様性への称賛は、その多様性をキリスト教へと統一・回帰させる上記のような歴史観から見出されるのだろうか。彼によれば、パーチャスが宗教的多様性を受容している証は、非キリスト教世界における理念や儀礼の例をそれらのいずれも退けることなく取り扱うという相対主義的態度が『巡礼』全体を通じて示されることである<sup>(26)</sup>。しかし、世界の永遠性を

信じず、言語の分裂ゆえに人間が一つになることはないと思える無神論者と自然主義を擁護する人々を批判するなかで、復活の後、使徒たちによって言語の多様性が乗り越えられ新たなエルサレムが実現されると記されることによって、パーチャスの諸宗教に対する相対主義的態度は霞んでしまう。パーチャスによって新しい試みとして提示される宗教史は、最終的には多様化した諸宗教がキリスト教という上部構造の中に置かれることによって、カルヴァンや『共通祈祷書』に示される既存のキリスト教史と明確に分離しえないものとなるのである<sup>(27)</sup>。

ここで、以上に述べてきたディモックによる議論をまとめつつ、本稿で『巡礼』を分析するために重要である点を明らかにしたい。最初の2点の「新しさ」、すなわち反ローマ・カトリック的姿勢と、漸進的に墮落する宗教が最終的にキリスト教へと統合されるという同時代のプロテスタント的な歴史観はどちらも、教父たちによる異端（他宗教）叙述と比較した際には「新しい」方法であるが、近世においては珍しくない論法であり、『巡礼』やパーチャスに固有の特色とは言えない。3点目の「新しさ」である宗教的相対主義の萌芽、すなわち非キリスト教とキリスト教の両者を宗教の語によって包摂する態度がパーチャスに見いだされるとの主張は、『巡礼』にキリスト教的な歴史観が採用されていることによって曖昧なものとなっている。近世における宗教観の変化を跡付けるといふ本稿の背景にある主題にとって、ディモックによって『巡礼』の3点目の「新しさ」として示される宗教的相対主義の萌芽という要素は無視できない問題である。しかしながら、パーチャスの相対主義的態度を提示するためにディモックが根拠とする箇所は多くない。

ディモックは、『巡礼』の表題に記される「大洪水以前の古代の諸宗教、それらが公にされて以来の全ての時代における異教的、ユダヤ的、サラセン的なものを、彼らの様々な見解、偶像、託宣、神殿、聖職者、断食、祝祭、供犠、そして宗教的儀礼とともに明らかにする」<sup>(28)</sup>という文言を最初に示す。そして、パーチャスが上の文言通りにあらゆる宗教を同等に扱ったことの証明として、版を重ねるたびに非キリスト教の視点を取り入れた箇所（例えば1617年版ではムハンマドの生涯に関するサラセン人の物語）が加筆されたことを挙げる<sup>(29)</sup>。加えて、非キリスト教徒の敬虔さをキリスト教徒が見習うという論法を——こうした論法もまた、以前からキリスト教徒によってしばしば用いられてきたものだが——パーチャスが用いたことも示される<sup>(30)</sup>。とはいえ、これらの例は『巡礼』、ひいてはパーチャスにおける宗教相対主義的観念の萌芽が生じた思想的経緯までは明らかにしてくれない。そこで次章では、前記の問題の一端に答えるために『巡礼』第1巻における記述を検討する。

## 5. 『巡礼』において示される宗教（2）—『巡礼』第1巻における宗教描写と宗教相対主義の兆し—

### 5-1 アダムにおける真の宗教について

『巡礼』は1613年の初版において、すでに700頁を超える大著であり世界中の地域や宗教とその実践への言及を含むため、その全編を一度に扱うことは、かえって同著における宗教観を不明瞭にする可能性がある。そのため以下では、世界と宗教の始まりから古代バビロニア、アッシリア、シリア、フェニキア、パレスチナの宗教について記す『巡礼』第1巻に

着目し、『巡礼』が議論の前提とする宗教がいかなるものか、またパーチャスの示す相対主義的観念はいかに示されるかを考察する。聖書の記述に基づきつつ世界の創造、最初の人間アダム、楽園追放、アダムの子孫たちについて語ることから始まる第1巻は、パーチャスが聖書や古典を引きつつ、『巡礼』全体の基本概念である宗教を基礎付ける部分である。つまり、第1巻、とりわけ第1巻前半の議論を検討することによって、パーチャスにおいてわずかに見出される宗教的相対主義が彼の宗教観に由来するか否か、もし由来するのであれば、どのような思想によってその相対主義を提示するに至ったかを示しうるであろう。

パーチャスの述べるところによれば、第1巻で最初に描写されるのは人間の墮落以前に存在した「最初の（それゆえに最上の）宗教」<sup>(31)</sup>である。最初の宗教が最上であるという言葉からは、前節において述べられた真の宗教の漸進的墮落という歴史観を読み取りうる。さて、原初の宗教は楽園追放以前のアダムの宗教として次のように記される。

しかし、我々の現在の議論の主題であるアダムに戻ると、原罪以前の彼の宗教は、彼を、彼がまだ引き離されていなかった神に再会させるものではなく、自然が彼に植え付けた経験のなかで、彼をより早く〔神に〕結びつけ、また日々、彼をより〔神の〕近くに寄せるものであった。<sup>(32)</sup>

アダムは、原罪以後の墮落し神から切り離された人間とは異なり、常に神と共にあったために、自然によってもたらされる経験に従うのみで十分であった。自然は神と人を割くことなく、両者をより強く結びつける役割を果たしていたのだとパーチャスは述べる。しかしアダム以後の人間は墮落し、もはや神と共にはない。そのために、現在の人間にとっての「真の宗教は、それで彼〔人〕が救われるであろう、人間を神と和解させ、再び結びつける正しい方法」<sup>(33)</sup>となるのである。「人間と神を和解させ」る、あるいは「再び結びつける」という前記の表現は religion の語源の一つとされる religare（結びつける）を踏まえており、加えて religion の語源に対するパーチャスの解釈は、『巡礼』における宗教相対主義的な態度の源泉を知るために重要である。そのため、religion の語源とその解釈については後に詳述することとし、さしあたっては以上の記述から、原初の真の宗教とは、人間が自然に従うことによって悪影響を受けない宗教であったということ、その宗教は人間が未だ墮落しておらず、神と人間の関係が破綻していなかったからこそ成立しえたのだということを示しておきたい。

## 5-2 原罪以後の人間における「自然に従う」ことの意味

では、墮落した人間にとって、自然に従うとは、どのような状態を指すのだろうか。パーチャスは自然を「盲目の案内者 a blind guide」と述べつつ、以下のように『巡礼』の主題を提示する。

創造の時における人間の最初の清らかさ、罪によるそこからの墮落、自然（盲目の案内者）が膨大な誤った宗教を通じて導く迷信の脇道、あるいは神のみが定め導きうる真の新しく生命ある道における将来の栄光によって、かつての純粋性を回復しようとする試みが

我々の長大な作業の主題である。<sup>(34)</sup>

この記述によれば、自然は数多くの迷信や誤りを生み出し、人間を神から遠ざける道へと導く性質をもつ。だが、先に述べたように原初の人間には自然に従うことで神に接近することができたということは、自然ではなく、人間の墮落という状態こそが自然によって道を誤らされる原因であると言いうるであろう。

上の引用において、パーチャスが「迷信」というキリスト教徒にとって否定的な言葉を用いながらも、迷信によって現れる道と神によって啓示される正しい信仰の道とを併記することは注目に値する。というのも、両者の並列によって非キリスト教に対して正統性を証明する余地が与えられているように見受けられるためである。この記述は、パーチャスが宗教的多様性を認めているとも取れる記述が『巡礼』中に存在することの証左の一つとなろう。ただし、先に述べたように迷信という言葉が用いられている以上、パーチャスが実際に非キリスト教の正統性を肯定していた可能性は、極めて低い。人間が原初の状態を回復する手段は、『巡礼』の世界観が依って立つキリスト教的な神によってしか与えられず、神が定めた道以外は自然によって惑わされる場ではない。つまり自然に従うことは、楽園追放以後の墮落の状態にある人間にとっては、正しい宗教（キリスト教）の信仰を持たない状態なのである。

墮落した状態にあるキリスト教の信仰を持たない、すなわち自然に従った状態の人間は、不可避に迷信や誤った宗教に誘導される。なぜなら「宗教それ自体は自然的であり、全ての人間の心に刻み込まれている」<sup>(35)</sup>ためである。宗教は人間の内面に本来的に備わっているのだ、とパーチャスは次のような表現をも用いて主張する。

ある国では人はある装いの習慣を見、別の国では別の習慣を見る。食物についても同様である。その一方、服を着ることは自然であり、食べ物を食べることはより自然であり、すでに述べたように、何らかの宗教を見て取ることは何よりも自然なことである。<sup>(36)</sup>

服飾や食物は地域によって異なるが、服を着ること、食べ物を食べることはあらゆる地域で、正確に言えば、人間として生きている以上、避けることのできない行為である。宗教をもつことも、衣服を纏うことや食物を摂取することと同様に、人間にとって不可欠であるとパーチャスは主張する。しかしながら現在の人間は墮落しているために、「それ〔自然的に与えられた宗教〕は（ここで我々が見るように）無宗教よりも誤ったもの」<sup>(37)</sup>なのである。

### 5-3 楽園追放以後における宗教について

以上の記述にしたがえば、パーチャスは非キリスト教をキリスト教よりも劣ったものとして位置付けつつも、非キリスト教とキリスト教の双方に対して「宗教 religion」という呼称を用いているようである。キリスト教史的世界観を全面的に採用するパーチャスの術語においては、宗教と異端、迷信とセクトという語の用法の間に曖昧さがあるとの指摘もなされている<sup>(38)</sup>。エリザベス朝後期とジェームズ 1 世の時代に特徴的であるというこの術語のずれは、『巡礼』における宗教観を不明瞭にしている。以下ではパーチャスが宗教とは何か

について説明する箇所をいくつか挙げ、原罪以後の人間にとっての宗教の性質、宗教における信仰と儀礼の関係を示すが、宗教の定義を試みる記述の内に、異端への蔑視とキリスト教への称賛が共に現れることに留意したい。

宗教とは何か、という問いに対して、パーチャスは反語を積み重ねつつ答える。

神に対する人間の義務と、神に通じる最も狭い方法を我々が学ぶ学問でないのならば、宗教とは何であろうか。そして神、世界の創造、世界の摂理や世界の秩序、魂の不死性、人間の墮落と不完全性、我々の支配性と我々自身から見いだされる至上の善の承認でないならば、宗教の全てのはたらきとは何であろうか。<sup>(39)</sup>

宗教とは神に接近する方法の探究であると共に、人間が神に対してなすべき物事を行うこととされる。同時にキリスト教的な要素、すなわち神と神によって創られた世界、魂の不死、原初の完全性からの人間の墮落、世界の支配者としての人間の地位の存在を認めることも宗教であることの証の一端として示される。ここで注目すべきは、「神に対する人間の義務」という文言である。パーチャスにとって「人間の義務」とは、内面的信仰だけを指すのか、あるいは何らかの儀礼をも含むのであろうか。諸時代・地域の儀礼にも言及する『巡礼』における両者の関係については、次のような記述が挙げられる。

さよう、最もみだらで残酷で下劣で悪魔的な観察された事柄〔世界の諸地域で見られる一見残酷に見える埋葬法など〕は、この一つの原則、すなわち、神は奉仕されなければならないという原則に基礎づけられる。彼らはその奉仕を、あらゆる場所で不一致ではあるが宗教の必要性という一つの中心で一致している、自分たち自身の歪曲した規則に従うことによって示した。<sup>(40)</sup>

キリスト教徒からは一見受け入れ難い習慣や儀礼の中にも、神に対する当該地域の居住者なりの信仰を見出すことができる。そうした儀礼が生じる原因は、異教徒が彼らなりの神を認め、神に対して奉仕する必要性を感じ、奉仕の行為を実行に移すためである。異教的な神への奉仕は、キリスト教徒から見れば「歪曲した規則」でしかない。しかし、人間は本質的に宗教的であるために、民族間で相異なる儀礼も彼らの異教的な神への信仰心も、やはり宗教を希求する心から生じている。つまり異教徒の信仰・儀礼も宗教の一部に含まれており、儀礼は「神は奉仕されなければならないという」内的な原因から生じている。

先の引用箇所では非キリスト教における儀礼が例として挙げられたが、宗教一般において儀礼が内面的な信仰の現れであることは、「宗教それ自体は心の中にあり、そこでそれら外面的儀式的結果を生み出している」<sup>(41)</sup>という、パーチャスによる一般論的な記述から明らかである。総じて言えばパーチャスの『巡礼』における宗教観は、神への信仰をあらゆる宗教の本質かつ源泉と捉え内的信仰を重視するプロテスタント的宗教観に則っていると言えよう。加えて、本項で挙げた記述からはキリスト教と非キリスト教の別を問わず、あらゆる宗教を宗教という一つの枠組みによって捉えようとする試みの徴が——すでにディモックが『巡礼』の別の箇所の分析において同様の結論を出したように、結果的にその徴は「歪

曲した」などの形容と、宗教を定義する際にキリスト教的世界観が採用されることによってかき消されてしまうが——認められるようでもある。

#### 5-4 『巡礼』における宗教多元主義的態度の萌芽と人間観

宗教という一般的なカテゴリの形成と、キリスト教に対する相対主義的な眼差しの兆しが『巡礼』に見られる原因として、第1巻に一つの示唆的な記述がある。宗教とは何であるかを反語的に示しつつ<sup>(42)</sup>、パーチャスは、人間を小さな世界とみなし、人間は世界以外のもののために造られたという哲学的議論に基づき、被造物である人間と神について、そして宗教の機能について言及する。

自身のためにそれほど永続的で実在的なものが作られた者〔人間〕は、このもろく惨めな生とは別のもののために造られたのに違いない。すなわち、永遠的な存在との永遠の生のために〔創られたのではなくてはならない〕。そして、そのことが全ての宗教の基礎である。……芸術も産業も市民社会も人間として人間を結びつけることはないが、これらの物事の基礎〔神、世界の創造、永遠の命といった事柄〕は何かしらの宗教において、人間本性の絆のみによって、人間たる彼らを神に結びつけてきた。<sup>(43)</sup>

世界が人間のために用意されたとすれば、人間の価値は世界よりも高く、また人間は現世的生の長さにとどまらない永遠的な価値をもつと想定しうる。この想定に基づけば、永遠的な価値をもつ人間は、現世的な生あるいは世界に奉仕するために生まれたのではなく、世界や人間を超えたもののために造られたと考えるのが妥当である。すなわち、世界の永続性を超えた「永遠的なもの」である神、神と共にある永遠の生のために人間は造られたと結論づけることができる。以上のような思索の過程を経てパーチャスは、人間が神によって神のために創造されたという認識が、あらゆる宗教の根本にあると主張する。

上記の主張には、『巡礼』が採用する人間観もまた、わずかに顔を覗かせているようである。芸術、産業、市民社会は、「人間」という属性を根拠として人間同士を結びつけることはない。しかし宗教は、「人間」という属性のみに基づき、人間を神に結びつけることができる。宗教は人間にとって自然的であるというパーチャスの主張と併せて考えれば、あらゆる人間は「人間である」という一要素のみによって、個々の宗教の中で等しく神に結びつきうるのである。言い換えれば、少なくとも個別の宗教においては、全ての人間は神に対して一まとまりの等しい地位に置かれていると言えよう。

もちろん、上の記述からは個々の宗教の中で、それぞれに「神」対「人間」という構図が成立することは明らかであるが、個々の宗教の垣根を越えて人間が人間として結びつけられるか否かは明らかでない。ここで、前節において総括したように、キリスト教と非キリスト教双方を含む諸宗教の総称としての宗教の定義は、人間が神に対して内面的信仰をもつことであるとパーチャスが暗示していることを思い出しておきたい。この本質的定義に従えば、自然的に宗教を有する人間は、何教徒であっても総体として結びつけられていると言いうるのではないか。つまり、これまで述べてきた『巡礼』における宗教の定義や宗教の語の用法から、次のような仮説が立てられるのではないだろうか。すなわち、パーチャスが宗

教を定義する際に、意識的にしろ無意識的にしろ、「神」対「人間総体」という構図を描き出したがために、諸宗教相対化の萌芽に結びつく基礎的構造が生まれたのではないだろうか。

本稿において扱う限られた範囲のみでは、上記の仮説に十分な答えを与える検証を行いうるには言い難いかもしれない。しかしながら、宗教 **religion** の語をその語の起源に遡って検討するパーチャスの姿勢を見ることで、先の疑問への答えを提示するための手がかりを示唆することはできよう。

**religion** の原型であるラテン語 **religio** には、一般的に 2 つの語源が想定される<sup>(44)</sup>。キケローの用法に由来する **relegere** (再び読む, 再び選ぶ) と、ラクタンティウスを通じてアウグスティヌスらによって採用された **religare** (再び結びつける) である。前者については、かつて、神々への崇拝に関する事柄を読み直す (**relegere**) 者が敬虔な者 (**religiosi**) と呼ばれたという、キケローによる記述が基である。後者は、人間が敬虔さによって神に結びつけられる (**religati**) というラクタンティウス『神聖教理 *Divinae Institutiones*』における記述に基づく。アウグスティヌスの場合は、ラクタンティウスの説に加えて、選び直す **relegere** という語も **religio** の語源に付け加えられる。

パーチャスも上記のような **religion** の語源に関する議論を紐解きつつ、宗教 **religion** の語は「元来はよそものであり……ローマ人から伝えられ、一般的な使用によって我々の間で独立し同化したものとされた」<sup>(45)</sup>と述べる。彼はキケロー、ラクタンティウス、アウグスティヌス、アキナスらの名を挙げ、彼らの間において宗教の語源やその語が指す実践の範囲が多様であることに言及し、原初における人間の墮落がなければ、宗教の語源・定義の多様化が起きるはずはなかったとして、次のように述べる。

というのも、人間が捨てる [**relinquere**] まで、つまり自分たちの最初の純粋性、またその中で彼らがそれ [純粋性] を持つ彼ら [人間たち] の創造者を手放すまで、彼らは結びつけられ [**religare**] たり、第二の選択をしたり、和解を求める必要がなく、それゆえ、彼らをより確かに、より早く神に結びつける [**religare**] であろう物事を探究し実践するという、精神のそうした苦痛と苛立ちを選択する [**relegere**] 必要もなかった。<sup>(46)</sup>

パーチャスにとって、先人たちによって宗教の語源として挙げられるラテン語は全て、人間が神から離れた墮落した状態にあることを表現している。人間が創造者たる神に背くことがなければ、神に再び結びつけられる必要も、そのために神から引き離されている現状を回復するための苦勞をする必要もなかったのである。本論にとってここで重要なことは、パーチャスによる上記の表現からは、原罪さえなければ宗教 **religion** という語が生まれることもなく、さらに言えば『巡礼』において宗教という語に包摂される信仰・儀礼は、すべて人間の墮落によって神から切り離された状態にあるという構造を読み取ることができるということである。聖書の歴史観を採用し、その歴史観を敷衍しつつ宗教一般について語ることによって、図らずもキリスト教と非キリスト教諸宗教、より正確に言えば神から切り離されたあらゆる人間を、同じ状態に置かれた集団として描き出すという状態が生じているとも言える。

たしかに、キリスト教——パーチャスにとっては特にイングランド国教会——のみが神との関係を回復する正しい方法を知り実践しているという意味において、原罪後の世界ではキリスト教は唯一の正しい宗教であると主張されるであろうし、ここでその主張の是非を問うことはできない。だが『巡礼』における記述に基づき、キリスト教徒と他の宗教の信徒という宗教を構成する人間という単位で見れば、人間は皆、神との繋がりを失っているという点においては共通性をもつ。そして、宗教という語の語源からも、あらゆる宗教が人間の原罪から生まれたと解釈される。このような人間観ゆえに、キリスト教も非キリスト教も同じ立場から始まる宗教であるかのような構図が生まれており、この人間観の中に『巡礼』において微かに現れる、キリスト教と非キリスト教を相対化する構造の源泉を見出しうることは示唆できよう。

## 6. おわりに

本稿では、『巡礼』に見出される「宗教史を語る」という行為においてキリスト教的歴史観が採用され、その範囲内で、総称的カテゴリとしての宗教の中にキリスト教と非キリスト教が等しく組み込まれる構造がいかんにして可能とされたかを検討してきた。聖書的記述を歴史として取り扱い、キリスト教的な原罪の観念を歴史に埋め込んだことによって、それをパーチャスが意図していたか定かではないものの、あらゆる人間が同じ状態に置かれ、キリスト教、非キリスト教の別を問わずあらゆる宗教が神との関係を回復することを試みるものとして等しく並べられるような議論の構造が発生した。もちろん、パーチャス自身はイングランドとその国教会の至上性を確信していたであろう<sup>(47)</sup>。しかし、前記の構造によって我々は、キリスト教を含む諸宗教の相対化の微かな兆しと、それを可能にする思想的基盤を見出すことが可能となる。

本稿で扱ったのは『巡礼』全体から見れば僅かな箇所のみであり、同時代・同系統の著作（例えば、パーチャスよりも相対主義的であるとの指摘がある<sup>(48)</sup>アレクサンダー・ロス）との比較検討には及ばなかった。そのため、同時代の著作との比較対照は今後の課題である。さらに言えば、先行研究において挙げたアーミテイジが主張する、非キリスト教徒に対するキリスト教徒の協同というパーチャスのコスモポリタンの思想と、本稿で結論づけたような人間観は調和しうるのかといった疑問を検討することも必要となるであろう。これら、本稿では着手できなかった課題とその検証については、稿を改めて論じることとしたい。

## 付記

本研究は JSPS 科研費 JP21J11900 の助成を受けたものである。

## 註

- (1) L. E. Pennington ed., *The Purchas Handbook: Studies of the Life, Times and Writings of Samuel Purchas, 1577-1626, Volume I*, The Hakluyt Society, London, 1997, p. 5.

- (2) 本邦題は、増澤知子著、秋山淑子・中村圭志訳、『世界宗教の発明—ヨーロッパ普遍主義と多元主義の言説—』みすず書房、2015年、81頁の記載に従った。また、本章に挙げるパーチャスによる他の著作の邦題は、デイヴィッド・アーミテイジ著、平田雅博・岩井淳・大西晴樹・井藤早織訳『帝国の誕生—ブリテン帝国のイデオロギー的起源—』、日本経済評論社、2005年、112-113頁に記載の邦題に準拠した。
- (3) Matthew Dimmock, “Faith, form and faction: Samuel Purchas's *Purchas His Pilgrimage* (1613),” *Renaissance Studies*, Vol. 28, Issue 2, John Wiley & Sons, Ltd, 2014, p. 264. <https://doi.org/10.1111/rest.12053> (最終閲覧日 2021年12月15日)  
原著の当該記述は *Hakluytus Posthumus, or, Purchas his Pilgrimes*, Vol. 1.4, p. 74 にあると述べられる。
- (4) David Armitage, “Purchas, Samuel,” *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford University Press, 2007. <https://doi.org/10.1093/ref:odnb/22898> (最終閲覧日 2022年1月8日)
- (5) アーミテイジ, 前掲書, 113頁。
- (6) 同上。
- (7) 同上, 120頁。
- (8) 同上, 115頁。
- (9) Guy G. Stroumsa, *A New Science: the Discovery of Religion in the Age of Reason*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, London, England, 2010, p. 30.
- (10) 増澤, 前掲書, 90頁。
- (11) 同上。
- (12) Samuel Purchas, *Purchas his Pilgrimage. Or Relations of the world and the Religions Observed in all Ages and Places Discovered, from the Creation unto This Present*, London, 1613, The Epistle Dedicatorie. 本稿における同著からの引用では、ページ番号等は1613年(初版)にある箇所については初版に準拠、初版にない箇所については出版年を示し当該年版のページ数を記載した。原文のイタリックは訳文中にそのまま反映させた。訳文中の [] 内は本稿筆者による。原文中の u→v, i→j 等の置き換えは行っていない。
- (13) Dimmock, *op. cit.*, pp. 269, 271, 275.
- (14) Purchas, *op. cit.*, To the Reader.  
He which admireth and almost adoreth the Capuchine Jesuite, or other Romanists, .....may see, in all these, the Romanists equalled by Heathens, .....
- (15) *Ibid.*  
.....most of their Popish Rites, deriued out of Chaldaean, Aegyptian, and other fountaines of Paganisme;
- (16) Dimmock, *op. cit.*, p. 271.
- (17) Purchas, *op. cit.*, p. 16.
- (18) Dimmock, *op. cit.*, p. 271.

- (19) Purchas, *op. cit.*, p. 28.  
the first diuision of Religion
- (20) Purchas, *op. cit.*, p. 88.  
……*gaue place to the Gentiles.*
- (21) *Ibid.*  
*The fall of them became the riches of the world, and the diminishing of them the riches of the Gentiles,……*
- (22) Dimmock, *op. cit.*, pp. 272-273.
- (23) Purchas, *op. cit.*, p. 546.  
the tawney Moore, blacke Negro, duskie Libyan, Ash-coloured Indian, oliue-coloured American, should with the whiter Europaean become *one sheepe-folde*, vuder *one great sheepeheard*……
- (24) Dimmock, *op. cit.*, p. 273.
- (25) *Ibid.*, p. 274.
- (26) *Ibid.*, pp. 275-6.
- (27) *Ibid.*, p. 276.
- (28) Purchas, *op. cit.*, 表題。  
Declaring the Ancient Religions before the Floud, the *Heathnish, Jewish, and Saracenicall in all Ages since, in those parts professed, with their seuerall Opinions, Idols, Oracles, Temples, Priests, Fasts, Feasts, Sacrifices, and Rites Religious:*
- (29) Dimmock, *op. cit.*, p. 275.
- (30) *Ibid.*, pp. 275-276.
- (31) Purchas, *op. cit.*, p. 15.  
the first (and therefore best) Religion
- (32) *Ibid.*, p. 16.  
But to come to *Adam*, the subiect of our present discourse. His Religion before his fall, was not to reunite him to God, from whome he had not beene separated, but to vnite him faster, and daily to knit him neerer, in the experience of that which Nature had ingrafted in him.
- (33) *Ibid.*  
……*True religion is the right way of reconciling and reuniting man to God, that he may be saued.*
- (34) *Ibid.*, p. 11.  
His first puritie in his Creation, his fall from thence by sin, his endeouour to recouer his former innocencie by future glory, either in the by-waies of superstition, which Nature (a blind guide) leadeth him into, through so many false religions [1614 版では Religions] ; or by *the true, new and liuing way*, which God alone can set him, and doth conduct him in, is the subiect of our tedious

- taske;
- (35) *Ibid.*, p. 15.  
Religion in it selfe is naturall, written in the hearts of all men……
- (36) *Ibid.*, p. 26.  
In one Countrey men obserue one habite of attyre, another in another: So likewise of diet: and yet is it naturall to be clothed, more naturall to eat, but naturall most of all, as is said, to obserue some kind of Religion.
- (37) *Ibid.*, p. 15.  
〔Religion in it selfe is naturall, written in the hearts of all men,〕 which wil (as here we shew) rather be of a false then no Religion:
- (38) Dimmock, *op. cit.*, p. 274.
- (39) Purchas, *op. cit.*, p. 26.  
For what else is Religion, but the Schoole, wherein wee learne mans dutie towards God, and the way to be linked most straitly to him? And what are all the exercises of Religion, but acknowledgements of the Godhead, of the Creation of the World, of the prouident order therein, and ordering thereof, of the Soules immortalitie, of Mans fall and imperfection, of our soueraigne and supream good to be sought out of our selues?
- (40) *Ibid.*, p. 27.  
Yea euen the most lasciuious, cruell, beastly, and diuellish obseruations, were grounded vpon one principle, That God must be serued: which seruice they measured by their owne crooked rules, euery where disagreeing, and yet meeting in one center, the necessitie of Religion.
- (41) *Ibid.*, p. 26.  
……Religion it selfe is in the heart, and produceth those outward ceremoniall effects thereof.
- (42) 下記の引用における中略箇所冒頭には、註 38 の文章が挿入される。そのため、原文と本稿の引用箇所の一部順番が異なることを付記しておく。
- (43) Purchas, *op. cit.*, p. 26.  
……hee, for whome so durable and substantiall a thing was made, must needes be made for another then this fraile and wretched life; that is, for the euerlasting life with him, that is the Euerlasting. And that is the foundation of all Religion. ……where as neither Art, nor Industrie, nor ciuill Societie hath bound men as men together, yet the grounds of these things haue bound them as men, by the meere bond of humane Nature, to God, in some or other Religion.
- (44) religion の語源については、次の文献を参照した。トマス・アクィナス著、稲垣良典訳『神学大全 XIX』, 創文社, 1991 年, 13-14 頁。川田熊太郎『仏教と哲学〈サーラ叢書 7〉』, 平楽堂書店, 1957 年, 70-83 頁。茂泉昭男訳『アウグスティヌス著作集 第二巻』, 教文館, 1979 年, 397-398, 407 頁。三上真司「Religio——宗教の起源について

での考察のために」『横浜市立大学論叢 人文科学系列』Vol. 64, No.3, 2013 年, 151-187 頁。

(45) Purchas, *op. cit.*, p. 15.

…… by birth a forreiner, by common vse made a free-denizen among vs, descended from the Romans,……

(46) *Ibid.*, p. 16.

For till men did *relinquere*, relinquish their first innocencie, and the Author of whom, and in whom they held it, they needed not *religere*, to make a second choice, or seek reconciliation, nor thus *religere*, with such paines and vexation of spirit to enquire and practise those things which might *religare*, binde them surer and faster vnto God:

(47) パーチャスはコスモポリタンの思想を持ちつつも、イングランドを唯一とは言えないものの、一つの選民国家とみなしていた（アーミテージ, 前掲書, 115 頁）。

(48) Dimmock, *op. cit.*, pp. 277-278.

A form of relativizing religions in early modern England:  
Samuel Purchas's *Purchas his Pilgrimage* as an example

Yuka KAWASOKO

In the first half of the seventeenth century, Anglican clergy Samuel Purchas attempted to compose a history of religion, compiling various documents on diverse regions of the world according to his subject, religion. This paper focuses on one of his works, *Purchas his Pilgrimage* (1613), and examines what structure of that work makes us conceive that it embraces an endorsement of religious diversity or a subtle relativization of Christianity. *Pilgrimage* describes that religion is natural for human beings. Then, based on the bible, locating the original sin in history, it presents a contemporary Calvinistic historical perspective that after the fall of man, the first and most perfect religion gradually corrupted and diversified. The definition of religion and the view of humanity in Purchas's writing demonstrates a structure that arranges entire humanity after the expulsion from paradise on the identical condition of being separated from God. Besides, it also shows that every religion, including Christianity, is paralleled in desiring to restore the relation to God. Founded on this structure of the argument and the attitude to religions, *Pilgrimage*, though Purchas might be unwilling, renders a form of relativizing religions possible.